

商家總七といふもの、娘にて、人の家に嫁しけるが、その家衰微に及びて、夫に捨られ、親のもとにかへりけれども、親の家もまたおとろへて、父母を養はんが爲めに、與左衛門が方に身をうりて、遊女とはなりしなり、その頃與左衛門は、江戸の廓へ移りける時にあたりて、よき遊女をつれ行かんと、十一人の遊女をえらみける中に、ことに濱萩はその志し尋常ならず、風雅の道にもうとからざれば、わけてあはれみをかけ、江戸に下るにのぞみて、濱萩は與左衛門に、わが父母もろともに、江戸へくだりたきよしの願を申しけるに、許されざりければ、客にかたらひ、事のよしを歎きけるに、其客豪富のあき人にて、彼が孝心を感じ、いとやすき望みかなとて、路資をあたへて、あるじ與左衛門に頼みけるに、費をいとへばこそ、かれが願ひも聞ざりしなりとて、こともなげに承引たれば、濱萩はふたおやをも伴ひつゝ、下りけり、濱萩勤めの中おこたりなければ、他の遊女もこれにならひて、その家繁榮し、主人も亦數多の益を得たれば、高砂といへる茶店をしつらひ、濱萩が親達につかはしたり、かの濱萩はたしなみよくて、身をつゝ、しみ、明くれに父母をかへり見て、勤めながら日々親のもとへ行かよひけり、かゝれば廓の中にて、誰れか賞譽せざるものなからんや、その頃濱萩が發句に、

うき人に手のはづかしき火鉢かな、後にある貴人に根曳せられて、出雲の國にいたり、親子三人にて、めでたき暮しとなれるも、孝の恵みなるべし、そのころ行儀難波とて、その名を傳へたり、

〔近世畸人傳二〕遊女大橋

都島原の遊女大橋實の名は律もと彼所に大橋といへる名妓あり、またよみ手書ぬるが、その手の名を嗣よるづみやびを好めり、

〔當世武野俗談〕新吉原松葉屋瀬川

新吉原江戸町松葉や半右衛門抱瀬川といふ傾城は、十ヶ年以來は、五丁町に並ぶ方なき全盛な